

子どもが園の環境に出会い、遊び、学びに向かう
－愛と知の循環によって遊びが世界へと広がる

2025年

無藤 隆（白梅学園大学）

保育者と子どもの間の信頼関係という情愛に基づく見通しから安心空間へ

- 保育者は子どもとの安定した愛着関係を育て、子どもの安心を確保する。さらに安全基地としてまわりの環境への関わりを支える。
- 子どもは他者（特に保育者また他の子ども）を見て、その関わるところから自らも環境への関わりを始める。
- 子どもがまわりの環境を探索し、その子なりの遊びを自発的に始めるとともに、その子どもが保育者がつききりでなくてもやっていけると保育者は見定める。同時に、子どもが保育者を折りに振れて参照し、ヒントや手助けや支えを求めるが、なおかつ自分でやろうとするようになる。それが保育者と子どもの間の信頼関係の構築である。
- 保育者はそのような信頼関係という心情的な結びつきと子どもの活動への見通しが立つところを頼りにして、幾人もの子どもの保育を進める。
- そこから園が子どもと保育者が共に過ごし、安心して、面白い、ワクワクする空間となっていくのである。

自発的な活動としての遊びという「遊び性」が活動に浸透していく

- 出会いから学びへと至る要になるのが遊びである。遊びを拡張し、学びへと至るであろう経験の場と変えたのである。その出会いから遊びとして、
 - ①子どもの思いつきの活動をすることで環境的また自己の関わりの潜在可能性を発見していくこと（知と呼びたい）と楽しさ（愛と呼びたい）とを重ねることと、
 - ②その思いつきから少し先に実現したいことを思いついて実現するように務める機構が働く。そこに自発的な活動としての遊びという概念が成立したのである。
- 遊びはあくまで思いつきであり、多種多様な活動を次々に行う仕組みであるが、それが継続していくことで学びの経験につながるだろう。それは遊びで実現したいことが生まれそれを目指すという短期の課題解決を長期的な探索とそこでの新たな課題の発見につないでいく仕組みを導入したことによる。
- そこに保育者の直接的あるいは環境的援助が働き、課題の目標を実現するという意味での活動が長い時間での活動となり、それが繰り返し行われる活動の「循環」過程を作り出すこととなったのである。この活動の循環という仕組みが学びを保育者の援助を呼び込み、学びの経験を保証していく。

愛と知の循環性、好きになることと理解していくことが保育の要である

- 子どもはまわりの環境すなわち世界に対して、心情としてつながる。
- 心情の受動性(環境を素敵だと感じる感性の広がり)と、能動性(その中の特定のもの・人と遊ぶ中で愛し関わる)の両面が生じていく。
- まわりの環境が好きになり、濃密な感情がそこに広がる。そのような濃密な肯定的感情を「愛」と呼ぶ。
- また子どもは知的な関わりによって環境の物・人・出来事へとつながる。
- それは園の環境を超えた広い様々な世界との通路を経て、そこに憧れと予感が生まれる。
- 知性の受動性(まわりに起こる物事の特徴に気付く)と能動性(物事を利用し目標に向けて考える)の両面が生じていく。
- そのものの自体への特徴への関心が広がっていく。特徴の関連がつかめる、発展する先を考える。いくつもの関わりが生まれて、重なっていく。そこに関わりとして好きになり、知っていることのことの厚みが生まれる。
- このようにして世界への愛は知と連動し、この世界への子どもの参入を育てていく。

園の環境との出会いから始まる

- 環境を整え、その出会いを用意する。
- 環境とは、いわば子どもが出ていく「世界」のモデルであり、具体的には保育内容としての出会いを可能にするものである。
- 子どもの主体的な関わりを支える。その出会いからの活動において資質・能力のプロセスを始めることである。驚く（センス・オブ・ワンダー）からの面白さを感じ、活動を進め、そこで感じ・気づき、次第に目標が生まれて工夫する過程を進める。
- 遊びの始まりは思いついたことをすることを認めることであり、そこでの多様な始まりが起こる。そこから実現したいことのイメージが生まれ育つことを援助する。
- そこでの面白さを仲間と共有し、さらなる発展を図り、分かったことを確認する。それが学びの過程である。
- そのためにこそ、子どもの「好き」を大事にし、そこから経験を諸々の「通路」を介して「世界」へと広げていくのである。
- その経験が営まれるあり方が園での「生活」なのである。それは通路を介して、家庭や地域の生活とつながりながら、子どもの主体的な活動を可能にし、同時に園を超えた世界への発展を感じさせていくのである。

遊びとその環境を子どもと保育者がともになり再構成して、遊びを増幅し、その確認が学びとなっていく

- 子どもの環境への出会いから遊びが始まる。
- その発展という増幅過程の援助が要である。子どもが保育者また他の子どもとともに、関わるもの・環境を再構成し、遊びの発展が生まれる。
- その際、行っている遊びやそれをどうしていくかの意見交換や記録が重要になる。
- ある程度進んだところでの発見・工夫・できたことを整理し、確認し合い、子どもたちの共有財産としていく。それが学びである。
- そこに資質・能力や10の姿による確認を導入できる。それはできたかどうか自体ではなく、その発展の姿があり、そこに発見や工夫が起きているか、面白く楽しく好きになることが起きているかである。

園としての幸せ空間・面白空間の探索から対話空間のアイディアの生成へ

- 園が安心し、幸せに楽しく過ごし、面白いことが起こり、作り出し、さらに子どもたちが保育者と共にアイディアを生み出し、展開していく空間となっていく。
- そこでは何でもありなのだが、同時にまわりへの配慮が欠かせない。ものへの、子どもへの、大人への、そして社会への配慮である。
- 互いに配慮しつつ、自分のやりたいことを実現しようとするのが子どもの演技である。
- ものを作り出し、ごっこをして、そこに手応えを感じ、同時に自分の思うことの実現を図る。
- 社会への広がりや本物との出会いを介在して、実感し、いくつもの社会に生きることが予期され予想される。
- このような、遊び、世界、演技が園の空間の中でもものへの呼応また物作りを他の子どもとともに実現していくのが園での保育という場である。